

二〇二六年度

# 豊島岡女子学園中学校

## 入学試験問題

(一回)

# 国語

### 注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は  から 、2 ページから 23 ページまであります。  
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

一 次の文章は、夫や妻などといったパートナーを指す新たな呼び名がなかなか定着せず、人々が呼び名の選択に困っているという「パートナーの呼び名問題」について述べたものである。これを読んで、後の一から十までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

「間違<sup>まちが</sup>った日本語<sup>は</sup> 恥<sup>は</sup>ずかしい」「正しい日本語<sup>は</sup> 恥<sup>は</sup>ずかしくない」という価値観は、日本語を「正しいかどうか」という基準で評価する傾向<sup>けいこう</sup>を示している。日本語の話し手は、自分がどのような呼び名で、どのようなパートナー関係を表現したいのかを考える前に、正しい日本語かどうかでことばを選ぶよう<sup>よ</sup>うだ。

このような言語<sup>ご</sup>イデオロギーを、本書では「正しい日本語観」と呼ぶ。①「正しい日本語観」は、主に二つの考え<sup>か</sup>え方から成<sup>な</sup>っている。

ひとつは、日本語は、それぞれの場面で正しい話し方が決ま<sup>き</sup>っており、話し手にとって大切なことは、正しい話し方のルールを<sup>を</sup> 学び、そのルールに適切に従<sup>したが</sup>うことだ、という考え<sup>か</sup>え方だ。

二つ目は、正しい話し方のルールは、すでに決ま<sup>き</sup>っており、一般<sup>いっぱん</sup>の話し手には、ルールを<sup>へんこう</sup>変更する権利も、責任もない、という考え<sup>か</sup>え方だ。

すぐ分<sup>わ</sup>かるとおり、この二つの考え<sup>か</sup>え方は密接<sup>みせつ</sup>につなが<sup>な</sup>っており、「正しい日本語観」はこの二つの、日本語の使い方に関する従<sup>したが</sup>順<sup>じゆん</sup>で受け身<sup>うけみ</sup>な態度<sup>たいど</sup>に特徴<sup>とくごう</sup>付けられる。順番<sup>じゆんぱん</sup>に見<sup>み</sup>ていこう。

第一<sup>だいいち</sup>の「正しい話し方のルールに従<sup>したが</sup>う重要性<sup>じゆうじやうせい</sup>」は、特に敬語の使い方に関する意見に多く見られる。敬語に関する数多くの公的<sup>こうてき</sup>、私<sup>し</sup>的な言説<sup>げんせつ</sup>は、それぞれの場面には適切な呼び名や話し方があることを強調<sup>きやうこう</sup>している。たとえば、二〇〇七年に文化審議会が答申<sup>こたしん</sup>した『敬語の指針』の「自分や相手の呼び方の問題<sup>もんだい</sup>」では、以下のように述べられている。

自分のことをどう呼ぶかについては、場面に「オウジタふさわしい言い方がある。ただし、必ずこうしなければいけない」と決まりがあるわけではない。

ここには「必ずこうしなければいけないという決まりがあるわけではない」とも書いて「②」、その前に「場面にオウジタふさわしい言い方がある」とある。「ふさわしい言い方」をしなければ、「適切な選択ができない人」とみなされてしまうかもしれない。呼称に関しても、「場面にふさわしい選択」は重要なのだ。

言語学者の岡本成子とジャンネット・シバモト・スミスは、敬語に関する日本政府の出版物を丹念に分析し、「日本政府は、それぞれの場面には正しい敬語があるという考え方をづくり出し、社会に普及させる上で、積極的な役割を果たしてきた」と指摘している。

敬語だけではない。日本語の話し手が「正しい話し方のルール」を重視する傾向は、第六章で見た、③他人のパートナーを呼ぶ時の選択にも表れている。「主人」や「旦那」に違和感を持っていても、「他人のパートナーは丁寧に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先する。どのような呼び名を使って、どのようなパートナー関係を表現したいのかという、自分の考えよりも、「正しい」とされている規範を尊重するのだ。

長いあいだ、「正しい言い方を選ぶ」ことに意識が向いていると、「自分の考えでことばを選ぶ」経験は減っていく。この二つの違いを、私自身が実感した出来事がある。

四〇年以上前にアメリカに留学したときだ。周りの学生を見てみると、教授をいろいろな名前で呼んでいた。そこで、一番お世話になっていた教授に、「先生のことを何と呼んだら良いですか?」と聞いた。すると、

「何と呼んでもかまわない。プロフェッサー・スミスでもいいし、ミスター・スミスでもいいし、ジョンでもいい」

と答えたのだ。そう言われて、私は、④次の言葉が出てこなかった。教授をなんと呼んだら良いか、自分で決められなかったか

らだ。

日本にいたときは、何も考えずに「〇〇先生」と呼んでいけば良かった。それが「正しい」呼び方であり、大事なものは、場面にふさわしい「正しい」呼び方を学んで、それを使えることだった。先生をなんと呼びたいか、自分で考えて決めるなどということは、思ってもみなかった。だから、相手とどういう関係でいたいのかを考えて「自分らしい呼び方」を選ぶことなどできなかったのだ。

この出来事は、私に日本語観について考える機会を与えてくれた。私たちは、場面に適したことを選ぶことにかけては有能だ。それは、それぞれの場面には、その場面に適した正しいことばの使い方があっていて、どのようないかなことばが、どのようないかな場面に適切かはすでに決まっている。必要なことは、「正しい日本語」のルールを習得してことばを使い分けること。

このようなスタンスは、日本語を「正しいか／正しくないか」という視点ではかり捉える傾向を強める。人の話し方を聞いていても、自分が話し方を選ぶときにも、それが「正しい話し方かどうか」ばかりが気になる。

もちろん英語でも、「場面に適したことばを選ぶ」ことは重要だと考えられている。しかし、それと同じぐらい重視されるのは「選択がある」ことだ。北米では「自由」の具体例のひとつが「選択があること」だ。だから、「自分を何と呼んでもかまわない」と言った教授は、ある意味、私に「選択する自由」を与えてくれたのだ。

文化によっては、この「選択する自由」をb幼少期から与えている。三〇年ほど前に、娘がカナダの小学一年生になったときのことだ。担任の先生から、クラスの子どもたちに日本の折り紙を教えてくれと頼まれた。ところが、私のはりきって教室に入ると、先生が一番に宣言したのだ。

「モモコから折り紙を習いたい人は教室の前に来て。習いたくない人は、うしろの読書コーナーで本を読んでいてください」すると、数人の子どもが、教室の後ろにトコトコと歩いていった。

⑤これには、驚いた。日本の小学校ではみんなが同じ事をするのが当たり前だった。ところが、カナダの先生は小学一年生にも

「選択する自由」を与えたのだ。さらに、小学一年生でも選択する機会を与えられれば、自分がどうしたいか決めて行動することができるのだ。

当時の私と言えば、昼食を食べるにも付け合わせはフライドポテトかマッシュポテトかにはじまって、サラダのドレッシングまで選ばなければならないのが面倒くさくて、「⑥早く日本に帰って、「A定食！」って注文したいなあ」と思っていた。「選択する自由」が苦痛だった。そんな私が、教授をなんと呼ぶかなど決められるはずもなかった。

もちろん、カナダにも「選択する自由」が面倒な人はいるし、日本にも選択できる人はいるだろう。ただ、「正しいものを選ぶ」と「自分で選択する」がどのくらい強調されているのか、その程度が異なるのだ。

これは、どちらが良いという話ではない。カナダでは、自分の選択に固執して、人間関係がうまくいかなくなってしまう例も見てきた。ここで確認したいのは、日本語の話し手は、「自分の考えで選択する」よりも「正しい話し方」のルールを優先する傾向が強いという点だ。

ルールを優先するという従順な意識は、自分ではなく「誰かに正しい呼び名を決めてほしい」という他力本願な姿勢につながる。「正しい日本語観」を特徴付ける二つ目の考え方は、「一般の話し手には、正しい話し方を決める権利はない」というものだ。この考え方は、アンケートに寄せられた意見に、もっとも端的に表現されている。パートナーの呼び名問題を解決するために、「誰かに正しい呼び名を決めてほしい」という意見があるのだ。

・もう、新しく作り出して欲しい！ 愛着もわきそうな、男女対等でフラックで、けれど失礼でないような呼び方を。日本語学者とか、古典学者とか、だれか良い案ありませんかね。

(女性30代、「ハフポスト二〇二一年調査」)

・男女関係なく〇〇と呼びましょう！ とか決定してほしい。

(女性30代、「ハフポスト二〇二一年調査」)

・良くない呼び名があるなら良い呼び名はこうであると示してほしい。

(50代男性・公務員、「中日二〇二三年調査」)

二〇二二年二月にテレビ番組『五時に夢中!』\*8で、パトナーの呼び名問題が取り上げられた。出演していたマツコデラックスは、他人のパトナーをどう呼ぶかについて以下のように訴えた。

「正しい言葉を教えてよ。⑦ 私たちずっと悩んでるのよ」

これらの意見から分かるのは、自分たちには何が正しい呼び名か決める資格はない、あるいは、決める責任を取りたくないという意識だろう。だから、「日本語学者とか、古典学者とか」、自分以外の誰かに決めてほしいと訴える。誰かが決めてくれれば、「私たち」は責任を取る必要がない。

「誰かに決めてほしい」という他力本願な意識は、呼び名に関して法律などが制定されれば、大した抵抗もなく新しい呼び名が普及することをしても明らかだ。

たとえば、第一章でも見たように、二〇〇二年に「看護婦」が「看護師」に変更された。それまで、この職業に従事している人のほとんどが女性だったこともあり、「婦」という女性を表す漢字が使われていた。ごく少数の男性には「看護士」が使われていた。しかし、二〇〇一年に「保健婦助産婦看護婦法」が「保健師助産師看護師法」に名称変更され、翌年には性別による呼び名の区別が撤廃され、男女ともに「看護師」となった。背景には、男女雇用機会均等法にcモトツイテ、男性の就業をうながす目的があると言われている。

⑧ 「看護婦」から「看護師」への変更はまたたく間に受け入れられ、ジェンダー中立な「看護師」は日本全国に普及していった。主従関係を表さないパトナーの呼び名が七〇年近くも普及していないのに、「看護師」が順調に普及した理由は、法的な決定があるかないかだろう。日本語の話し手は、法的な決定があれば、つまり個人ではなく国が責任を取ってくれるのならば、呼び名を変えることに抵抗感が小さいのだ。

(注)

- \*1 言語イデオロギー——言語に対する考え方。
- \*2 言説——ことばで述べられたもの。
- \*3 文化審議会——ぶんかしんぎかい 文部科学省に設置された機関。
- \*4 答申——他の機関からの質問や依頼いらひに対して、意見や回答を述べること。
- \*5 プロフェッサー——教授。
- \*6 固執——こしつ 物事にこだわり、主張してゆずらないこと。
- \*7 フランク——気さくであること。
- \*8 マツコデラックス——芸能人。表記は原文に即そくした。

問一 —線①『正しい日本語観』は、主に二つの考え方から成っている」とありますが、二つ目の「正しい日本語観」の具体的な説明はどの段落から始まりますか。段落の最初の五字を抜き出さないさい。

問二 空らん「②」に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あるし
- イ あるが
- ウ あるので
- エ あれば
- オ あって

問三 —線③ 「他人のパートナーを呼ぶ時の選択」とありますが、日本語の話し手はどのような選択をすると考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「他人のパートナーは丁寧<sup>ていねい</sup>に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先すると、本当に丁寧<sup>ていねい</sup>な呼び方なのか違和感<sup>いわかん</sup>があるため、「主人<sup>だんな</sup>」や「旦那<sup>だんな</sup>」という呼び名は使わない。

イ 「他人のパートナーは丁寧<sup>ていねい</sup>に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先し、その呼び名で関係性が表現できるのか違和感<sup>いわかん</sup>があっても「主人<sup>だんな</sup>」や「旦那<sup>だんな</sup>」という呼び名は使わない。

ウ 「他人のパートナーは丁寧<sup>ていねい</sup>に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先し、本当に丁寧<sup>ていねい</sup>な呼び方なのか違和感<sup>いわかん</sup>があっても「主人<sup>だんな</sup>」や「旦那<sup>だんな</sup>」という呼び名を使う。

エ 「他人のパートナーは丁寧<sup>ていねい</sup>に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先すると、その呼び名で関係性が表現できるのか違和感<sup>いわかん</sup>があるため、「主人<sup>だんな</sup>」や「旦那<sup>だんな</sup>」という呼び名を使う。

オ 「他人のパートナーは丁寧<sup>ていねい</sup>に呼ぶ」という言葉づかいのルールを優先し、その呼び名で関係性が表現できるのか違和感<sup>いわかん</sup>があっても「主人<sup>だんな</sup>」や「旦那<sup>だんな</sup>」という呼び名を使う。

問四 —線④ 「次の言葉が出てこなかった」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本にいたときに使っていた「先生」にあたる言葉で教授のことを呼ぼうと思った筆者だったが、日本で使っていた「先生」にあたる言葉を自分で考えて選ぶことができなかったから。

イ 学生と教授との関係性が個々の呼び方に表れているのだと気付いた筆者だったが、一番お世話になっているという関係性を表せるような呼び方を自分で考えることができなかったから。

ウ どのような関係であっても先生であれば「〇〇先生」と呼びさえすれば良いという日本の価値観で生きてきた筆者は、教

授から自分の浅はかさを見すかされているように思い困惑こんわくしたから。

エ その場面に合わせた正しい呼び方が使えさえすれば良いと思っていた筆者には、自分と教授との関係性を表す呼び方を、色々な呼び方の中から自分で決めることができなかったから。

オ 何と呼んでもかまわないと教授から言われたものの正しくない呼び方をすれば恥はじをかくと思った筆者は、何と呼ぶのが正しい呼び方なのか答えを探して考えこんでしまったから。

問五 —線⑤「これには、驚おどろいた」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 担任の先生から折り紙を教えてほしいと頼たのまれたということは生徒も折り紙を習いたいと望んでいるのだと筆者は思っていたのに、習いたくないと思っていた生徒が少なからずいたことが分かったから。

イ 担任の先生が頼たのんだ手前、筆者から折り紙を習いたくないという意思表示えんりよをすることは失礼なことのように思われるのに、一部の生徒は折り紙を習いたくないという自分の意思を遠慮なく表明していたから。

ウ みんなに同じことをさせる日本の小学校の先生とは違ちがってカナダの小学校の先生は個人せんだくの選択を重視しており、みんなと同じことをしなくてもよいという雰囲気ふんいきを自然と作りだしていたから。

エ 日本の小学校ではみんなが同じことをするのが当たり前だが、カナダの小学校では自分がそれをやりたいかやりたくないかを選択せんたくして行動に移さなければならぬという文化の違ちがいを体感したから。

オ 筆者から折り紙を習うか習わないかという選択せんたくの自由が子どもうちから尊重されており、生徒自身も自分の意思をもとに行動できるという日本では想像できないような光景を目の当たりにしたから。

問六 ー線⑥「早く日本に帰って、『A定食！』って注文したいなあ」とありますが、「A定食」を注文するということには、どの

ようなことが象徴しょうちゆうされていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 制限のある中で選択せんたくの余地が残されているということ。

イ その場の状況じょうきょうに合った従したがうべき選択肢せんたくしがあるということ。

ウ 自分の意思で全てを決定しなくてもよいということ。

エ 細部までを自分で決める自由は与あたえられていないということ。

オ 自分の考えにもとづいて選択せんたくをしてよいということ。

問七 ー線⑦「私たちずっと悩なやんでいるのよ」とありますが、「悩なやんでいる」内容の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちには正しいパートナーの呼び方を決める権利がなく、パートナーのことを呼びたいと思ったとしても正しい呼び方で呼ぶことができないことに悩なやんでいる。

イ 誰だれもパートナーの正しい呼び方を決めてくれないので、パートナーを呼びたくてもその呼び方が正しい呼び方かどうかを気にしなければならぬことに悩なやんでいる。

ウ 学者や国といった権力のある存在がパートナーの呼び方を決めてくれれば定着しやすいのには、パートナーの正しい呼び方を決めてくれない無責任な態度に悩なやんでいる。

エ パートナーの呼び方を決める権利は自分たちにはないとはいえず、呼び名を定着させることに無関心でいたがゆえに自分たちも責任を問われることになるのだろうかと思なやんでいる。

オ 誰だれも正しい呼び方を決めてくれないせいで、パートナーへの呼び方が果たして本当に自分とパートナーとの関係性を正確に表しているのかが誰だれにも分からないことに悩なやんでいる。

問八 ー線⑧『看護婦』からく普及ふぱいしていった」とありますが、どういことですか。その説明として最も適当なものを次のア

オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 男女の平等を重視するようになったことを受けて、国が「看護師」という新たな呼び方を決めたことよって、呼び名を決める責任を負わずにすんだ人々は「看護師」という呼び方を新たな正しい日本語のルールとして受け止め、抵抗なく使うようになったといこと。

イ 社会全体が抱える男女雇用の不平等とい問題を解決するために、その糸口として国が責任を持って「看護師」という新たな呼び方を決めたところ、人々は国が決めてくれたこの呼び方を使うことで知らぬ間に男女の平等を意識するようになっていったといこと。

ウ 性別を感じさせない「看護師」という新たな呼び方を国が設定したところ、呼び名の決定を政府任せにしていた人々がその呼び方を続々と使うようになり、性別よって就業者に違いが出ているとい本来の解決すべき問題が見えづらくなっってしまったといこと。

エ ある職業が特定の性別のイメージを持つとい問題を解決するために、国は「看護師」という新たな呼び方を決めたが、人々は何も考えずに国に従順に従って呼び方を変えただけで、社会の問題を意識することはなく、国が期待したようにはならなかつたといこと。

オ 性別よる呼び名の区別に煩わしさを持っていたものの、誰かが解決策を提示するのを待っている社会の風潮を受け、国が「看護師」という呼び方を作ったところ、自分たちが呼び名を決める責任を負わなくて良いと安心した人々が次々にその呼び方を使うようになったといこと。

問九 二重線「この二つの違い」とありますが、これは人の呼び方に対する考え方において、どのようなことを重視する違いとして表れるでしょうか。「前者は、後者は…」という形で、七十字以上九十字以内で答えなさい。

問十 一線 a 「オウジタ」・ b 「幼少」・ c 「モトヅイテ」について、以下のそれぞれの問いに答えなさい。

(1) 一線 a 「オウジタ」・ c 「モトヅイテ」のカタカナを、送り仮名を含めて正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいいにはっきりと書くこと。送り仮名はひらがなで書きなさい。)

(2) 一線 b 「幼少」と組み立ての同じ熟語として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 年少    イ 少雨    ウ 減少    エ 少女    オ 多少

三 次の文章を読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

文ふみは在宅勤務ちやちやをしながら、高齡猫こうれいねこの茶々ちやちやの看病けんごを夫いっしょの賢吾けんごと一緒にいっしょに行っている。茶々ちやちやの病状びやうじやうは日に日に悪化あくわし、その看病けんごのため文ふみはあまり休息いふみをとれていなかった。それを心配しんぱいした賢吾けんごが気分転換てんかんのために洋食屋やうしきやオリオンのランチらんちに行くことを提案ていせんしてくれ、促うながされるがままに文ふみはお店みせへ向かった。

「お待ちせいたしました。トマトソースのオムライスでございます」

ぼうつとしていたら、いつの間にか料理りょうりが出来上できあがっていた。運まんできた真湖まこさんにお礼れいを言い、カトラリーケースからスプーンすぷーんを手てに取とった。

トマトソースオムライスは、わたしがオリオンで一番好きいちばんなメニューだ。今日けふだっていつもと少しも変わらない味あじを作つくってくれている。

なのに、食べても、食べても、①心こころから美味おいしいと思うおもうことができかない。

昔からオリオンの料理を食べると幸せな気持ちになれた。落ち込んでいるときも、悩んでいても、オリオンに来てお腹がいっぱいになったら、全部が大丈夫だと思えるようになった。

でも今は駄目だ。今だけは、美味しいものでは満たされない。

それでしか埋められない穴があるのだ。②かけがえのない大事なものは、他の何で満たそうとしても足りない。何にも代えられない。

「うにゃあん」

はっとする。視線を下げると、足元にネロがいた。

「ネロ。あ、もしかして出窓？」

「にゃむ」

「いいよ、どうぞ」

「にゃうにゃ」

ネロは向かいの椅子に乗り、そのまま出窓にぴよんと跳び移った。

日当たりのいい出窓はネロのお気に入り場所だが、窓際のこの席に客がいるときには、必ず客に了承を得てからでないの  
ぼらない。躡けたわけではないらしい。ネロが自分でそうすると決めたのだ。

「ネロは賢い子だよねえ」

今の時季には熱くなってしまうような、艶々の黒い毛並みを眺める。ネロはお座りをしながら、くわあっと大きくあくびをした。

「これだけ賢いと、本当に猫又になれるかな」

ネロほどの賢さがあれば、もうとっくに猫又ですと言われたって驚かないけれど。

「③茶々は、なれなかったよ」

猫は、二十年生きると猫又になるという。ならば二十歳になった茶々も猫の妖怪になったっておかしくない。でも茶々の尻尾は一本のまま、妖怪にならず、普通の猫として生涯を終えようとしている。

「うにや」

ネロが鳴く。黒猫は、尻尾を揺らしながらわたしをじっと見ている。いつもなら出窓にのぼるとすぐに寝てしまうのに。

「ごめん、冷めちゃうから早く食べろって言ってるんだね」

「にやあう」

「ありがとね、美味しいよ」

ネロは「うにっ」と短く鳴いて、ぷいと顔を逸らした。わたしは残っていたオムライスを食べきり、コーヒーを一杯飲んでから席を立った。

レジに入ったのはくるみちゃんだった。真湖さんを捜すと、キッチンで作業をしていた。オリオンのシェフはくるみちゃんひとりだが、スイーツ作りは真湖さんが担当している。少なくなった品を作り足しているのだろう。

「そうだ文さん、渡したいものがあるんです」

お会計を終えたところで、くるみちゃんがそう言った。

「わたしに？」

「ちよっと待っててくださいね」

\*2  
バックヤードに向かったくるみちゃんは、見慣れたパッケージの袋を持って戻ってきた。茶々が唯一食べてくれた、猫の腎臓病用の療法食だ。

「これ、他の常連さんからネ口<sup>ねぐち</sup>になって戴<sup>いた</sup>いたんです。飼<sup>ねこ</sup>ってた猫ちゃん<sup>ねこ</sup>がもう食べられなくなったからって。でも、茶々ちゃんもこれ食べてるって言ってた覚えがあつたので、なら文<sup>ふみ</sup>さんに渡<sup>わた</sup>そうと思<sup>おも</sup>って置いておいたんですよ」

「そういえば、食べ始めたばかりの頃<sup>ころ</sup>に「やっと食べられるものが見つかった」とくるみちゃんに話<sup>わ</sup>したことがある。憶<sup>おぼ</sup>えていてくれたのか。」

「ありがとう」

差し出されたものを受け取<sup>み</sup>った。未<sup>み</sup>開<sup>かい</sup>封<sup>ふう</sup>の袋<sup>ふくろ</sup>を見て、これをくるみさんへ譲<sup>ゆず</sup>った人のことを考えてしまった。自分の子に一番に食べてもらいたかつただろうに、どんな思<sup>おも</sup>いで、開<sup>ひ</sup>けてもいらないごはんを渡<sup>わた</sup>したのだろうか。

わたしも。いつか茶<sup>ちや</sup>々のために揃<sup>そろ</sup>えたものを、手放<sup>て</sup>さなければならぬ日が来るのだろうか。いつか、茶<sup>ちや</sup>々<sup>ちや</sup>を思<sup>おも</sup>い出<sup>で</sup>にしなけれ

ばいけない日が。  
視線<sup>しせん</sup>が下<sup>くだ</sup>がる。唇<sup>くちびる</sup>の端<sup>はし</sup>が震<sup>ふる</sup>えてしまう。

「でも、茶<sup>ちや</sup>々<sup>ちや</sup>も、もう食べられないかもしれない」

④泣<sup>な</sup>きそうになり咄<sup>とつせ</sup>嗟<sup>せ</sup>に顔<sup>かほ</sup>を伏<sup>ふ</sup>せた。くるみちゃんが慌<sup>あわ</sup>てた様子<sup>ようす</sup>でカウンターから出てくる。

「文<sup>ふみ</sup>さん？ あ、ごめんなさい、わたし」

「ううん、くるみちゃんの気持<sup>きもち</sup>ちは、本当に嬉<sup>うれ</sup>しいよ。茶<sup>ちや</sup>々<sup>ちや</sup>も喜<sup>よろこ</sup>ぶと思<sup>おも</sup>う」

「文<sup>ふみ</sup>さん……」

「ありがとうね。ご馳<sup>ちやう</sup>走<sup>そう</sup>様<sup>さま</sup>でした」

顔を上げないまま「⑤」を返<sup>かえ</sup>し、店<sup>みせ</sup>を出<sup>で</sup>た。A重<sup>あ</sup>たい夏<sup>なつ</sup>の空<sup>そら</sup>気<sup>き</sup>が肌<sup>はだ</sup>にもつたりと纏<sup>まと</sup>わりついた。

早く帰<sup>かえ</sup>らないと。そう思<sup>おも</sup>うと同時に、まだ帰<sup>かえ</sup>りたくないと思<sup>おも</sup>ってしまった。自宅<sup>自宅</sup>マンシヨンまでの最短<sup>最短</sup>の道<sup>みち</sup>を行<sup>い</sup>かず、実家<sup>実家</sup>のほうを經由<sup>経由</sup>し、少しだけ遠<sup>とほ</sup>回りして帰<sup>かえ</sup>路<sup>ろ</sup>につく。

オリオンから実家までは歩き慣れた道だ。物心ついた頃から数え切れないほど通ってきた。緩い坂道。低い赤煉瓦の塀。持ち主自慢の枝垂桜。友達とよく遊んだ小さな公園。

足を止める。肌の焼かれる炎天下、猫のフードを抱えながら、ぼんやりと人のいない公園の片隅を見つめる。

茶々と出会った場所だった。家族でオリオンに食事に行った帰り道、わたしはここであの子を見つけた。

茶々の小さな呼び声を、わたしだけが聞いたのだ。

茶々はそして、わたしの家族になった。そばにいて、悩みを聞いて、辛いときには朝まで寄り添い、向こうもたっぷりと甘えてくれた。なんでもない一日を過ごすたびに、一生の宝物が増え続けた。

⑥わたしの人生の小さな幸せを集めたら、きつと茶々の形になる。

「……茶々」

わたしの茶々。たくさんの思い出と、経験と、幸福をくれた可愛い子。

茶々が与えてくれたものを、わたしはどれだけあの子に返せているだろうか。茶々の中にある思い出も、わたしと同じくらい、温かいもので溢れているだろうか。

「茶々」

走って帰った。逸りながらドアを開けると、リビングへ続く廊下の奥から、よろよろと茶々が歩いてきた。

ここ数日、まともに歩くところなど見たことはなかったのに、茶々はわたしのほうへと自分の足で向かってくる。その後ろから賢吾が見守っている。

「茶々、お出迎えしにきてくれたの？」

時間をかけて廊下を渡った茶々は、わたしの目の前でバランスを崩した。倒れそうになった体を支え、抱き上げる。甘えた声を出す茶々の頭のとっぺんに鼻を寄せる。

「ありがとね、茶々」

涙が滲んだ。茶々が心配するといけなから顔は見せないようにした。茶々を抱き締めるわたしの肩を賢吾の腕が包み込む。茶々のいない人生を、考えることはできなかった。だからこそ別れの訪れるその瞬間まで、家族みんなが笑って過ごそうと思っ

た。茶々が、優しいものだけを抱えて旅立てるように。

それこそが、わたしが最後に茶々に返せる幸福なのだから。

四日後に茶々は息を引き取った。

苦しむことなく、眠るように、最後に深い呼吸をして、茶々は長い生を終えた。

その日はわたしと賢吾と三人で過ごし、翌日に葬儀と火葬をした。茶々の骨は年齢のわりにしっかりと残っていた。うちの茶々は骨になっても可愛いね、と賢吾と笑い合いながら、随分と小さくなった体を白磁の骨壺に納めた。

動物霊園からの帰り、家には寄らずに『洋食屋オリオン』に向かった。すべてが終わったところで急にお腹が空き、昨日からまともに食事をとっていなかったことを思い出したのだった。

喪服ではなかったが、わたしも賢吾も上下を黒い服で揃えていたから、くるみちゃんはひと目見て察したようだ。キッチンからわざわざ出てきてくれた彼女に茶々のことを伝えると、くるみちゃんはみるみる涙を溜め、他のお客さんもいる中で泣き出してしまった。

「ううっ、ずびませんっ。わたしより、文さんたちが泣きたいはずなのに」

「ううん、茶々のためにありがとね」

「こ、こちらこそです」

「今までね、オリオンに茶々を連れて来られなかったから、やっと一緒に来られて嬉しいよ」  
隣の椅子となりに いすに置いてある紙袋かみぶくろに目を遣る。

その中には茶々の骨壺ちやちや こつぽが入っている。

「ぐすっ……茶々ちゃん、いらっしやいませ、ずびっ」

「ふふ。くるみちゃん、ミートドリアをふたつお願いします」

「はい、すぐに作ってきますっ」

涙はなを吸すすり、くるみちゃんはばたばたとキッチンへ戻もどっていく。わたしは賢吾けんごと目を合わせて笑った。今日の料理はいつもどおり、心から美味おいしく感じられる自信があった。

ふと。賢吾けんごの隣の椅子となりに いすに、ネロが跳とび乗った。客きやくがいるテーブルには椅子いすにだって勝手に乗らないネロだから、急に現れたことに驚おどろいてしまった。

「ネロ？」

声を掛かけるが、ネロはいつものようにこちらに愛嬌あいせうを振りまくでもなく、しかし出窓いせうにのぼるでもなく、椅子いすにお利口に座まってどこかを見ている。

「にやにや」

ネロが鳴いた。⑦ご機嫌きげんなどときの顔つきだった。どうしたのだろうか、ひとりで何かを陽気しやんせに喋り続けている。

視線は、わたしの隣の席となりにに向いていた。誰も座まっていない……茶々の骨壺ちやちや こつぽが置いてある椅子いすだった。

「……ネロ」

賢吾けんごを見た。目を真っ赤にした賢吾は、小さく一度頷うなずいた。

ネロは誰だれかとお喋りしゃべりをするように鳴いている。

B 祝福を呼ぶような夏の日差しが、黒猫の柔らかな髭を光らせる。

「茶々、いるの？」

にやむ、と答えるときだけ、ネロの黄色い瞳がわたしを見るから。

堪える間もなく涙が溢れ、声を上げて泣いてしまった。

( 『丘の上の洋食屋オリオン はなむけのひと皿』より「ミートドリアと星の声」

沖田 円 )

(注)

\*1 ネロ——十八歳になる洋食屋オリオンの看板猫。

\*2 バックヤード——店の裏側の作業スペース。

\*3 茶々と出会った場所だった——文が茶々と出会ったのは十二歳の時だった。

\*4 白磁——陶磁器の一種。

問一 —線①「心から美味しいと思うことができない」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 茶々の病気が日に日に悪化していくので、茶々の死を受け入れられそうにないことを毎日悩んでいるから。

イ 茶々が今も病気で苦しんでいるのに、自分が楽しく食事をしていることに罪悪感を抱いているから。

ウ 茶々との別れが近いと感じているが、もうあきらめることしかできないので途方に暮れているから。

エ 茶々と夫の賢吾のことが心配で、早く食べ終わらなければいけないと気が急いでいるから。

オ 茶々の病気は歳のせいだと思いつつ、自分にできることがもつとあったはずだと後悔しているから。

問二 一線② 「かけがえのないく足りない」とありますが、「かけがえのない大事なもの」は本文中では何とたとえられていますか。最も適当な言葉を本文中から五字で探し、抜き出しなさい。

問三 一線③ 「茶々は、なれなかったよ」とありますが、それについてハト江さんとシマ子さんが次のように話をしています。次の会話を読み、後の各問いに答えなさい。

ハト江 え 茶々の飼い主の文は茶々が「猫又」になれなかったとネロに話しているんだね。

シマ子 まこ そうそう。この「猫又」ってなんなの？ 文章の中には二十年生きると猫の妖怪になるって書かれているけど。どんな妖怪なんだろう。

ハト江 え 猫又ってなんだろうと思って、私も調べたの。そしたら、すごくたくさんの言い伝えが残っていてね。「Ⅰ」にある自分の家の飼犬を猫又と間違えて大騒ぎしたお坊さんの話とかは有名なんだって。他にも「猫又駅」という駅もあって、猫又が住んでいたという伝説のある山と関連があるそうだよ。

シマ子 まこ じゃあ、猫又ってすごく有名な妖怪なんだね。やっぱり妖怪だから怖いのかな。文は、茶々のこと怖いと思ってなさそうだけどなあ。

ハト江 え 文は怖いと思ってないと思う。猫又には山の中にいて人を襲う獣と、長年人に飼われていた年老いた猫が化けてなるものがあるんだって。猫又にも種類があるそうで、人間を恨んでいる場合もあるし、恩返ししたり、苦しんでいる飼い主を助けてくれたりする場合もあるそうよ。しかも、人の言葉を理解して、会話できる猫又もいるんだよ。

シマ子 まこ そっかあ。そしたら、「茶々はなれなかったよ」と言ったのは、文が「Ⅱ」を抱いていたからなんだろうね。

(1) 空らん「Ⅰ」には鎌倉時代に兼好法師が書いた随筆の題名が入ります。その作品の冒頭として最も適当なものを次のア

オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

イ ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

ウ 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

エ つれづれなるままに、日くらし硯におかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

オ 春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍のおほく飛びちがひたる。

(2) 空らん「Ⅱ」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 茶々が人を襲うことになっても、別れについて考えられないという思い

イ 茶々がどんな姿になってもいいから、いつまでも離れたくないという思い

ウ 一生懸命看病したから、茶々にその恩返しをしてもらいたいという思い

エ 茶々と多くの思い出話ができるくらい、ずっと家族でいたいという思い

オ たとえ猫又駅におくられても、これから先も一緒にいたいという思い

問四 ー線④「泣きそうになり咄嗟に顔を伏せた」とありますが、なぜ文はこのような行動をとったのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が辛い思いをしているとくるみに気づかれまいと、泣きそうな顔を見せないようにしようと考えたから。

イ 療法食を食べていた猫とその看病をしていた飼い主のことを想像すると苦しくて仕方なくなってしまったから。

ウ 現在の茶々の病気の状態も知らずに無邪気に療法食をくれようとしたくるみのふるまいにとても腹が立ったから。

エ 茶々がこの療法食を食べていた猫と同じ状況になった時に自分が他人に対して優しくできる自信がなかったから。

オ たくさんのお客さんが来て毎日忙しいはずなのに昔話したことを覚えていてくれたくるみの優しさに感動したから。

問五 空らん「⑤」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 掌 イ 仇 ウ 恩 エ 裏 オ 踵

問六 ー線⑥「わたしの人生の小さな幸せを集めたら、きっと茶々の形になる」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 辛い時もうれしい時も茶々が一緒にいてくれて幸せだったということ。

イ どんな時も茶々の幸せを最優先に考えて生活をしてきたということ。

ウ 茶々との思い出はいつまでも心の中で生き続けると気づいたということ。

エ 茶々に会おうまでにあった幸せな思い出を忘れてしまったということ。

オ 茶々が苦しい時に寄り添ってくれていたことを思い出したということ。

問七 ー線⑦「ご機嫌などきの顔つきだった」とありますが、なぜネロがそのような顔つきでいるのだと文は考えているのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 茶々の看病のため二人そろってくることができなかつた文と賢吾が、そろってオリオンに來たから。

イ 茶々の看病のため二人そろってくることができなかつた文と賢吾が、そろってオリオンに來たから。

ウ 茶々の看病のため二人そろってくることができなかつた文と賢吾が、そろってオリオンに來たから。

イ 今まで話に聞いていただけで会えなかった茶々と会うことができ、楽しく会話をしていたから。

ウ 前は美味しくなさそうに食事をしてた文が、今日は美味しそうにミートドリアを食べているから。

エ 大好きな文と賢吾と茶々と同じテーブルに着き、これから話をしながら一緒に食事できるから。

オ ずっと病気で苦しんでいた茶々が元気になってオリオンに来てくれ、久々に会うことができたから。

問八 二重線 A 「重たい夏の空気が肌にもったりと纏わりついた」、B 「祝福を呼ぶような夏の日差し」と文が感じる「夏」の様子が異なっている。これは文のどのような心情の違いを表していますか。「Aはくに対し、Bはく」という形で、「く」という違い」に続くように、五十字以内で答えなさい。

